OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アラビア語の動詞連続 : 言語類型論的視点の外国語教育への応用試論
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	外国語教育のフロンティア. 2020, 3, p. 265-283
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75640
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アラビア語の動詞連続：言語類型論的視点の外国語教育への応用試論

Serial verbs in Arabic, or on how to use language typology

仲尾　周一郎

Abstract

Linguists generally share the view that linguistics is a descriptive science of language in clear contrast to prescriptive pedagogy of languages, while on the other side of the same coin, non-linguist teachers of languages share the view that linguistics is a piece of junk that neglects practicality. These views, perhaps originally made to distinguish themselves from each other as independent academic fields, have led to unproductive mutual indifference. This article is a frank attempt to reconcile the two fields for a better relationship, by arguing how to introduce a linguistic way of thinking (in this article, a typological notion) to language teaching so that both linguists and learners can benefit from the same result.

"Serial verb construction (SVC)" is a common term for a syntactic phenomenon widely found in a number of languages of the world, such as West African languages, Atlantic creoles, and continental Southeast Asian languages. According to one of the broadest definitions of it, given by Dixon (2013), a SVC has more than two independent verbs which share at least one argument but are connected without a conjunction. While this definition meets a variety of constructions in (Written) Arabic, this term has been alien to the field of Arabic teaching—and in turn Arabic has been absent in the typological studies on SVCs. Based on previous reference grammars and textbooks of Arabic, this study tentatively argues that, in Arabic, various functions of SVCs may include: (i) sequence of actions, (ii) circumstantial qualification, (iii) purpose qualification, (iv) propositional attitude complementation, (v) direct experience complementation, (vi) utterance complementation, (vii) tense and aspect expressions, and (viii) causative expressions.

This definition and categorization of the SVCs in Arabic not only enable learners an easier understanding of the polyfunctionality of the syntactic construction but also enriches linguistic data on SVCs including unique features hitherto less-known to the typological studies on SVCs.

キーワード：アラビア語、動詞連続、言語学、外国語教育

1. はじめに[1)]

言語学者により広く共有されている言説の一つに、「言語学は言語の科学的研究であり、規範 (prescription) でなく記述 (description) を志向する点で、外国語教育とは一線を画する」というものがある。外国語教育（研究）では、これと表裏一体をなす「（過度に、あるいは伝統文法の枠を超えて理論がちな）文法学習は外国語習得にとって不必要／有害である」という言説がしばしば聞かれる。本来は両分野の独立性を明示することを目的とするこれらの言説は、結果的に非生産的な相互無関心へと繋がっている側面は否めない。しかし、外国語学習者に言語学的視点を効果的に導入すれば、両分野にとって、それぞれ将来の言語学者の育成や言語学的データの拡充、外国語学習を通じた論理的思考能力の育成や効率的な外国語習得に資する可能性が大いにある。本稿では、仲尾 (2019) に引き続き、アラビア語学習者を対象とする言語学的視点の導入方法について考察したい。

本稿では、アラビア語において、接続詞の介在なしに複数の定動詞が連続し、それらがひとまとまりの述語としてふるまう、という現象を扱う。この言語現象は、最広義には、言語類型論において「動詞連続 (構文)」(serial verb construction, verb serialization) と呼ばれてきたものに相当する (2 節冒頭参照)。

これらの術語が誕生して半世紀を過ぎた現在も、（西欧諸語には典型的にはみられないが）西アフリカ諸語、ピジン・クレオール諸語、大陸部東南アジア諸語などを中心とする世界の諸言語に広くみられる言語現象として盛んに研究が行われてきた。一方で、アラビア語研究・教育では、「動詞連続」という術語自体はほぼ全く用いられてこなかった[2)]。ただし、動詞連続に類する現象の一部は、原語による伝統文法の術語を用いて “*ḥāl* construction”「ハール（付帯状況）構文」、別の一部はそれらと意味的に相当する西欧諸語のカテゴリー名を転用し、“auxiliary verb”「助動詞」、あるいは一部の規範文法書では西洋古典語学の術語を用いて “asyndeton/asyndesis”「接続詞なし接続」と呼ばれる現象も知られてきたが、これらの諸現象の統語論的類似性・機能的多様性に着目した包括的・体系的な記述は期されてこなかった。結果として、アラビア語学習の現場では、学習者が体系的な理解を欠いており、文脈を推測しつつ受動的に「何となく」理解せざるを得ないという状況[3)]、類型論的動詞連続研究においても、アラビア語が全く扱われないという状況が存在してきた[4)]。

本稿では、目下の課題として以上 2 点を克服するための文法学習項目を構築することを目的として、既知の動詞連続的諸構文を主要な教科書・文法書の例を中心に整理する。ただし、本稿では、個々の構文が通言語的ラベルとしての「動詞連続」という術語と齟齬を来すか否か、あるいはどのような通言語的な定義が望ましいかを議論することや、統語論的変数（動詞を個別に否定・副詞修飾できるか等）を逐一テストすること、一次資料（文学テクスト等）からの積極的なデータの発掘・収集などを行わず、こうした課題を授業内

でのタスクや議論テーマとして活かすことを提案するに留めたい。

2. アラビア語における動詞連続

本稿では、管見の限り「動詞連続」の最広義の定義を示している Dixon (2013: 243) に則り、以下 (1) の諸基準を満たす文の構造を仮に「動詞連続」と呼ぶ。この他の通言語的概念として「動詞連続」の定義に関する議論においては、それらが単一の「節」をなすか、一方の動詞が他方の動詞の項でないか、などの基準も提唱されている (Haspelmath 2016)。しかし、前述のとおり本稿は「通言語的概念としての「動詞連続」がアラビア語にみられるか」を問うことではなく、以下の (表層的) 特徴でまとめられる現象の構造的・機能的多様性の整理を目的とするため、とりあえずこれらの認定基準は考慮しない。

(1) a.二つ以上の、それぞれ独立の述語をなしうる動詞 (定動詞)[5] が含まれること
b.それぞれの動詞を連結する要素 (等位・従位接続詞) を欠くこと
c.それぞれの動詞が少なくとも一つの項を共有していること

表層的に動詞連続の定義 (1) に当てはまる諸構文は、多くの言語において、実際には構文ごとに個別的解釈が必要になる。以下では、機能・統語論的特徴ごとにアラビア語における動詞連続的な諸構文を整理する。ただし、例は主要なアラビア語教科書・文法書から引用し、下記の略号を用いる：A1, A2 (Abboud & McCarus eds. 1983, Part 1, 2)、B (Badawi et al. 2016)、C3 (Cantarino 1975, Vol. 3)、F (Fischer 2006)、W2 (Wright 1967, Part 2)、WH (Woidich & Heinen-Nasr 2011)。太字 (e.g. ***dakal-a***) は動詞の連続に数えられる定動詞、下線 (e.g. wa) は動詞間に介入する接続詞、太字下線 (e.g. ***hāmil-an***) は非定形動詞 (動名詞や分詞) の対格／副詞形、すなわちある種の「副動詞」を示す。なお、グロスは簡易性を期し、できる限り英語で相当する形式 (人称・数についても 'I', 'my', 'me' など) を用いる[6]。

2.1 連鎖的動作

アラビア語では、主語を共有する定動詞句の等位接続は通常 (2) のように接続詞 *wa*= 'and' (あるいは *fa*= 'and then', *tumma* 'and then') などによって明示される。

(2) ***dakal-a*** *wa*=***sallam-a*** *wa*=***jalas-a***
entered-he and=greeted-he and=sat-he
「彼は [部屋に] 入り、挨拶し、座った」(B: 607)

これに対して、等位接続詞は (3) のように省略されることがあるが、この際は必ず個々

の定動詞は時制・相が一致しなければならない (W2: 287-288)[7]。現代語においても、習慣的に行われる一連の動作は (4) のように等位接続詞の省略が頻繁にみられるようである。

(3) a. *fa=**’arsal-a**　**’a‘lam-a**　bi=ḏālika　’abā=hu*
then=sent-he　informed-he　with=that　father=his
「彼は [書簡を (?)] 送り、父にこれを知らせた」(W2: 288)
b. ***qām-a**　**sajad-a**　la=hū*
arose-he　prostrated-he　to=him
「彼は（突如）彼に跪拝した」(W2: 288)
c. ***ġannā**　**’aḥsan-a***
sang.he　did.well-he
「彼は上手に歌った」(W2: 288)

(4) *ṯumma　**ta-drusu**=hū,　**tu-ḥallilu**=hū,　**ta-kšifu**　‘an　ḥudūdi=hī*
then　they-study=it　they-analyze=it　they-study　about　limits=its
「そして彼ら (公権力) はそれを吟味し、分析し、その限界を見出す」(B: 604)

この他、Fischer (2006: 208) は、「生き生きとした会話文」(直接話法での応答等) では、以下のように接続詞が現れないことを指摘しているが、こうした文は両動詞が項を共有していないため、動詞連続構文の一種とは考えられない。

(5) ***qul-tu**　matā　tazawwaj-ta=hā　**qāl-a**　wa=’ana　bi=‘adana*
said-I　when　married-you=her　said-he　and=I　in=Aden
「私はいつ彼女と結婚したのかと言い、彼は私がアデンに居た時だと言った」(F: 210)

2.2 付帯状況

先述の接続詞 *wa*= ‘and’ は、独立人称代名詞などを伴ったとき、(6a) のように付帯状況節標識としての機能を併せもつ[8]。付帯状況は、(6b) のように *wa*= (+ 人称代名詞) を省略することや、後続動詞を対格分詞形 (能動態であり、主語と性・数が一致する) にすることでも同等の意味を表すことができるため[9]、アラビア語学ではこれらをまとめて「付帯状況構文」(“*ḥāl* construction”, “circumstantial qualifier”, “Zustandssatz” など) と呼ぶ。このうち、(6b) 型の構文においては、先行動詞が移動（・状態変化）動詞であること、後続動詞は未完了形であること、両動詞は主語を共有することが多く、後続動詞が否定されることは少ない。

(6) a. ***waṣal-a*** *l=wazīru* *wa=ḥwa* ***ya-ḥmilu*** *rasā'ila* *hāmmatan.*
arrived-he the=minister and=he he-carry letters important
b. ***waṣal-a*** *l=wazīru* ***ya-ḥmilu*** *rasā'ila* *hāmmatan.*
arrived-he the=minister he-carry letters important
c. ***waṣal-a*** *l=wazīru* ***ḥāmil-an*** *rasā'ila* *hāmmatan.*
arrived-he the=minister carrying-ADV letters important
「大臣は重要な書簡を携えてやってきた」(A1: 535-536)

ただし、以下のように、(7) 先行動詞が移動動詞以外である例、(8) 後続動詞が完了形である例 (時制解釈は過去完了となり、この例では動詞前小辞 *qad* を伴っている)、(9) 後続動詞が否定されている例、(10) 先行動詞と後続動詞が主語を共有していない例なども見られるように、義務的な条件ではない (cf. A1: 537)。なお、両動詞の主語が異なる場合、後続動詞の主語は必ず動詞に後続する。

(7) *wa=**taḥaddaṯ-at*** *'ilay=hā* ***ta-ḍḥaku***
and=spoke-she to=her she-laugh
「彼女は笑いながら彼女に話しかけた」(B: 649)[10)]

(8) a. ***jalas-at*** ***tu-fakkiru*** ***qad*** ***'aġmaḍ-at*** *'aynay=hā [...]*
sat-she she-think PTCL closed-she eyes.DU=her
「彼女は両眼を閉じ [...] 考えながら座った」(B: 649)
b. ***qaḍā*** *muḥammadun* *layla=hū* *hādi'-an* *muṭma'inn-an*
spent.he Muhammad night=his tranquil-ADV peaceful-ADV
nazal-at *min=hu* *l=ḥummā*
went.down-it from=him the=fever
「熱が下がり、ムハンマドは静穏な夜を過ごした」(C3: 7)

(9) ***ṣār-a*** ***lā*** ***ya-'rifu*** *'ilā* *'ayna* *ta-qūdu=hū* *qadamā=hu*
walked-he not he-know to where they-guide=him feet.DU=his
「彼は自らの足がどこに導こうとしているかを知らずに歩いていった」(B: 649)

(10) a. ***daḵal-ā*** *š=šaqqata* ***ya-tba'u****=humā* *l=bawwābu* *bi=l=ḥaqībati*
got.in-they.DU the=apartment he-follow=them.DU the=doorman with=the=suitcase
「彼ら二人は―ドアマンが鞄をもって後に続きつつ―アパートに入った」(C: 247)

b. ***’aqbal-ū*** ***tu-‘niqu*** *bi=him* *ḵaylu=hum*
approached-they they-gallop with=them horses=their
「彼らは跳ねる馬に乗りながら近づいてきた」(F: 220)

これに対し、(11) のような敷衍節も、(6b) タイプの付帯状況構文と表層的には類似するが、二つの動詞句が項を共有していない点で、動詞連続の一種とは認めにくい。なお、本来は語彙的動詞である *ya‘nī*「それ (it.SG.M) は…を意味する」は、敷衍を表すフィラー (「つまり」) として文法化している。

(11) a. *hunā* ***ta-bda’u*** *ṣafḥatun* *jadīdatun* *min* *ḥayāti* *muḥammadin*
here it-start page new of life Muhammad
ta-bda’u *ḥayātu* *z=zawjiyyati* *wa=l=’ubūwati*
it-start life the=maritality and=the=paternity
「ここにムハンマドの人生の新たな一ページが始まる―結婚生活、父としての生活が始まるのだ」(C3: 8)

b. ***kān-a*** *ṭa‘āmu=hū* *ḵāffan* *mā* ***jalas-a*** *‘alā* *l=mā’idati.*
was-it food=his dry not sat-he on the=table
「彼の食べ物は乾いていた―彼は食卓につかなかったのだ」(C3: 9)

2.3 動作の目的

(6b) 型の付帯状況構文と表層的に類似している構文として、後続動詞が先行動詞の目的を表す (12) のような構文が見られる。表層的類似から、この構文も伝統文法においては “*ḥāl* construction”「付帯状況構文」のサブタイプ (例えば W2: 19-20, C3: 249, F: 221) とされ、教科書としては両構文を峻別したものは管見の限り存在しない。

(12) a. *mā* ***ji’-tu*** ***’a-d‘ū=ka*** *’ilā* *zufāfi* *bahā’a*
not came-I I-call=you to wedding Baha
「私はあなたをバハーの結婚式に呼ぶために来たのではない」(C: 250)

b. ***jalas-tu*** *’ilay=hi* ***’a-taḥaddaṯu*** *ma‘a=hū* *wa=’a-šrabu* *l=qahwata* *‘inda=hū*
sat-I to=him I-talk with=him and=I-drink the=coffee with=him
「私は彼と話しコーヒーを飲もうと、彼に向って座った」(C: 249)

c. ***’arsal-a*** ***yu-‘limu=hū*** *bi=ḏālika*
sent-he he-inform=him with=that
「彼はそのことを彼に教えるために書簡を送った」(W2: 20)

これまでに提示されてきた例文を見る限り、先行動詞が移動・状態変化動詞であり、後続動詞は未完了形であり、両動詞は主語を共有し、後続動詞が否定されない点で、この構文には典型的付帯状況構文よりも強い統語論的制約がかかるようである。また、(6a, c) 型構文での言い換えはできず、(13a) のように接続詞 (e.g. *li=*, *kay*, *li=kay*, *ḥattā*) を伴いかつ動詞を接続法 (SBJV, 非現実法の一種) にする、ないし (13b) のように動名詞対格形、(13c) のように前置詞＋動名詞の構造を用いることでしか類似の意味を表すことはできない。

(13) a. *lam* ***'ā-kud=ka*** *li=**'a-qtula**=ka*
not I-seized=you for=I-kill.SBJV=you
「私はあなたを殺すために捕えたのではない」(F: 223)
b. *lā* ***'a-qūlu**=hā* ***mujāmalat-an***
not I-say=it flattery-ADV
「私はそのことをおべっかで言っているのではない」(B: 179)
c. *wa=huwa* ***ya-zūru*** *miṣra kulla sanatin* ***li=mušāhadati*** *'āṯāri=hā.*
and=he he-visit Egypt every year for=watching ruins=its
「そして彼は遺跡を見に毎年エジプトを訪れます」(A2: 1)

動詞 *jā'a*「来る」には、目的構文と連続的だが、文法化しているように見える2種の構文もみられる。まず、補充法による命令形 (例えば *ta'āla* 'come. IMP. M.SG') には、(14a) のように未完了 (直説法)・1人称複数形の動詞未完了形直説法が後続し、勧誘を表す法標識となっているような用法が見られる。次に、その移動動詞としての語彙的意味が失われ、後続動詞が目的ではなく結果を表し、全体としてある種の場面展開を表す (14b) のような例もみられる。ただし、これが文語アラビア語としてどの程度一般的であるといえるかは現状では不明である[11]。

(14) a. ***ta'āla*** ***na-mšī*** *l'āna.*
come.IMP.M.SG we-go now
「おいで／ほら、もう行こうよ」(C: 10)
b. *fī bidāyati hāḏā l='usbū'i waṣal-at 'aḥmada risālatun*
in beginning this the=week arrived-it Ahmad letter
ta-qūlu 'inna zawju 'uḵti=hī qad māt-a.
it-say COMP husband sister=his PTCL died-he
jā'-a *'aḥmadu* ***ya-s'alu**=nī: 'a=kun-tu 'alā ḥaqqin fī=mā fa'al-tu?*
came-he Ahmad he-ask=me Q=was-I on right in=what did-I

「今週初め、アフマドに彼の義兄が死んだという手紙が届いた。アフマドは私に「私がしたことは正しかっただろうか」と尋ねてきた (“Ahmad came and asked me”)」(A2: 224)

2.4 命題態度を表す補文

アラビア語では、一般に命題 (あるいは思考・伝聞・知識等の内容) を表す補文は (15) のように接続詞 *’anna* によって導入される。しかし、(16) のようにこの接続詞を省略し、ある種の動詞連続構文としても言い換えることができる。これらによりどういった意味の差が生じうるかは現時点では不明である。

(15) *’a=lā* ***ta-ẓunn-īna*** *’anna* *ḏālika* *l=kalba* ***qad*** ***‘aḍḍ-a****=hū*
Q=not you.SG.F-think-you.SG.F COMP that the=dog PTCL bit-it=him
「あの犬が彼を噛んだのだと思いませんか」(B: 767)

(16) *lā* ***’a-ẓunnu*** *l=’umūra* ***sa=ta-ṣilu*** *’ilā* *hāḏā* *l=ḥaddi*
not I-think the=matters will=they-reach to this the=extent
「私は物事がそこまでに至るものとは考えていない」(B: 429)

2.5 直接経験を表す補文

(17) のように動詞 *ra’ā*「見る」は思考動詞として用いられることがあり、この場合は (15) と同様に補文標識を要する。

(17) ***fa=qad*** ***ra’ay-tu*** *’anna=hā* ***tu-ḥaddiṯu*** *šakṣan* *mā*
then=PTCL saw-I COMP=she she-talk person certain
「それで私は彼女が誰かと話しているものと見た（考えた）」(B: 675)

これに対し、*ra’ā* などの動詞 (e.g. *šāhada*「目撃する」、*wajada*「見つける」) が直接経験を表す場合、(18) のように後続動詞の主語は先行する直接経験動詞の目的語となり、接続詞は介在しない。なお、後続動詞は (18b) のように完了形でもありうる。興味深いことにこの構文は、(19) のように (6a, c) 型の構文を取りうることから、付帯状況構文と基本的に同じ統語論的構造をもつと考えてよい。

(18) a. *ḥīna* ***ra’at*** *’ismā‘īla* ***ya-ḍribu*** *’akā=hu*
when saw.she Ismail he-beat brother=his

「彼女はイスマイールが彼の兄を殴っているのをみたとき」(C: 246)

b. ***wajad-a*** *l=bāba* ***qad*** ***futiḥ-a***
found-he the=door PTCL was.opened-it
「彼はドアが開けられているのをみつけた」(F: 221)[12)]

(19) a. ***šāhad-ū*** *l=mabnā* *wa=hwa* ***ya-hwā*** *bi=buṭ'in*
witnessed-they the=building and=it it-collapse with=slowness
「彼らはその建物がゆっくりと崩れるのを目撃した」(WH: 280)

b. ***ra'ay-tu****=hū* ***nā'im-an***
saw-i=him sleeping-ADV
「私は彼が寝ているのを見た」(W2: 50)

なお、アラビア語では非限定の先行詞を修飾する関係節は節標識をもたないため (cf. (14b) *risālatun ta-qūlu*「…という手紙」)、以下のような例は (20a) 関係節としての解釈と (20b) 直接経験を表す補文としての解釈の両方が可能だと考えられる。

(20) ***ra'ay-tu*** *rajulan 'a'mā* ***ya-qūdu****=hū šābbun*
saw-I man blind he-lead=him youth
a.「私は若者が手を引く盲人を見た」(F: 219)
b.「私は盲人が若者に手を引かれているのを見た」

2.6 発話内容を表す補文の導入

アラビア語において動詞 *qāla*「言う」は発話を表す最も代表的な動詞であり、(21) のように間接話法での引用は接続詞 *'inna* が介在し、直接話法での引用では接続詞が介在しない。この動詞は、発話など言語行為を表す動詞が先行する場合、(22) のように発話内容を表す補文の導入としても用いられる。前節の構文と同様、この構文も (23) のように (6a, b) 型の構文としても現れうる。

(21) a. *qāl-ū* *wa=llāhi mā 'araf-nā=hu [...]*
said-they by=God not knew-we=him
「彼らは「神かけて我々は彼が誰か分からなかった [...]」と言った」(F: 208)

b. *qāl-a li='ummi=hī* *'inna=hū māḍin 'ilā mustašfā l=qaṣri l='aynī*
said-he to=mother=his COMP=he going to hospital Kasr el-Ayni
「彼は母にカスリルエイニー病院に行ってくると言った」(B: 791)

(22) a. ***katab-a*** *zawju* *'uk̲ti=hī* *'ilay=hi* ***ya-qūlu*** *'ana* *l'āna*
wrote-he husband sister=his to=him he-say I now
fī *sittīna* *min* *'umr=ī [...]*
in sixty of age=my
「彼の義兄は彼に「私はもう 60 歳だ [...]」と [手紙に] 書いた」(A2: 223)

b. ***ḥaddaṯ̲-a=nī*** *d̲āta* *yawmin* ***qāl-a*** ...
told-he=me certain day said-he
「ある日、彼は私に [...] と語った」(C3: 7)

(23) a. ***taḥaddaṯ̲-at*** *ma'a* *zawji=hā* *bi=l=mawḍū'i* ***qā'ilat-an*** ...
conversed-she with husband=her on=the=topic saying-ADV
「彼女は夫とその話について…と話した」(A2: 284)

b. *rāḥ-a* ***ya-bkī*** *wa=huwa* ***ya-qūlu*** ...
started-he he-cry and=he he-say
「彼は…と言って泣きはじめた」(B: 484)

2.7 使役表現

アラビア語では形態論的動詞派生による使役 - 非使役交替がかなり生産的に行われるため (例えば *waqafa*「止まる」vs. *waqqafa, 'awqafa*「止める」)、頻度としては少ないが、アラビア語では以下のような使役動詞 (例えば *wada'a*「…させる」<「放っておく」)、*'amara*「…するように言う」<「命令する」、*taraka*「… (するがままに) させる」<「捨てる」、*ja'ala*「…させる」<「化する、変える」、*dafa'a*「(強制的に) …させる」<「押す」など) を用いた迂言的使役構文が見られる。このとき、使役動詞の目的語と後続動詞の主語が共有され、後続の動詞は (24a, 25a) のようにいわゆる希求法 (JUSS, 非現実法の一つ)、ないし (24b, c, 25b) のように直説法の両方がありうる。特に *wada'a* の命令法は、(25) のように勧誘・希求を表す一種の法標識となっているといえそうである。

(24) a. ***mur****=hu* ***ya-'ti***
order.IMP.M.SG.=him he-come.JUSS
「彼がくるべく命令せよ」(F: 211)

b. *lā* ***na-da'u****=ka* ***ta-k̲ruju***
not we-let=you.SG.M you.SG.M-go.out
「我々はお前を出させない」(F: 221)

c. ***tarak-ū****=hu* ***ya-ʻūdu.***
left-they=him he-return
「彼らは彼を帰るままにした」(B: 493)

(25) a. ***daʻ****=nī* ***ʾa-ḏhab***
let.IMP.M.SG=me I-go.JUSS
「行かせてくれ」(B: 492)
b. ***daʻ-ū****=nā* ***na-rā***
let.IMP-M.PL=us we-see
「みなさん見ましょう」（または「みなさん見ていましょう」）(B: 492)

(24a, 25a) とやや類似した構文とみなされるものして、(26) のようなある種の条件文も存在する (cf. W2: 37-38, F: 211)。この場合、先行動詞は必ず命令形、後続動詞は必ず希求法となる。この構文でも通常2つの動詞は項を共有するようであるが、希求法は一般に単独で節をなすことができないため、これを動詞連続構文とみることはやや難しい。

(26) a. ***uṭlub*** ***ta-jid*** *mā* *ya-surru=ka*
seek.IMP.M.SG you.SG.M-find.JUSS what it-please=you
「求めなさい、そうすれば気に入るものが見つかるだろう」(B: 717)
b. ***sammin*** *kalba=ka* ***ya-ʾkul****=ka*
fatten.IMP.M.SG dog=your.SG.M it-eat=you.SG.M
「犬を肥えさせれば噛まれる」(F: 211)

2.8 時制・相表現

アラビア語の時制 (テンス)・相 (アスペクト) 形式は、まず大きく2種類の活用形、「完了形」('perfect', 例えば *katab-a*「彼は書い（てしまっ）た」)・「未完了形」('imperfect', 例えば *ya-ktubu*「彼は書く／書いている」) と、それに付加される2種類の動詞前小辞 *sa=* ('future', *sa=ya-ktubu*「彼は書く（だろう）」)、*qad* ('emphatic', *qad katab-a*「彼は (疑いなく) 書いた」、*qad ya-ktubu*「彼は書くかもしれない／書くこともある」) に加え、時制・相を含意する動詞が先行することによって示される。これらの時制・相表現に関わる動詞と後続動詞の間には、接続詞は介在せず、かならず主語が共有される (ただし、主題化された主語は先行動詞の前、主題化されない主語は両動詞の間に実現する)。

まず典型的にはコピュラ動詞 *kāna* は (27) のような種々の (絶対時制・相対時制・相がさまざまに組み合わされた) 複合的な時制･相表現を形成する。なお、これらの構文は (28)

のようにコピュラ動詞・主動詞いずれを否定しても同じ意味を表す。

(27) *a.* ***kān-a*** *l=’awlādu* ***ya-tarākaḍ-ūna***
were-they the=boys they-race-they
「男の子たちは走り回っていた」(B: 416)

b. *...ma‘a ḥulūli ṣ=ṣayfi* ***sa=yakūnu yu-’addī*** *wājiba=hū bi=ntiẓāmin*
...with advent the=summer will=he-be he-perform duty=his with=regularity
「夏までにはきちんと支払いをしているようにするつもりだ」(B: 419)

c. *al=fannānūna* ***kān-ū*** ***sa=ya-ḥmil-ūna*** *ba‘ḍa l=ma‘ūnāti l=‘ayniyyati*
the=artists were-they will=they-bear-they some the=expenses the=material
「アーティストたちは材料費をいくらか負担するところであった」(B: 418)

d. *wa=fī ṣ=ṣabāḥi* ***kān-a*** *l=maṭaru* ***qad*** ***sakan-a***
and=in the=morning was-it the=rain PTCL calmed-it
「そして朝にはすでに雨がおさまっていた」(B: 416)

e. *wa=lākinna=hā* ***sa=ta-kūnu*** ***qad*** ***ġarab-at***
and=but=it will=it-be PTCL set-it
「しかしそれ [太陽] は沈んでしまっているだろう」(B: 418)

(28) a. ***kun-tu*** *lā* ***’a-‘rifu*** *šay’an ‘ani l=muṭribati ’umm kulṯūm.*
was-I not I-know thing about the=singer ’Umm Kulṯūm

b. *lam* ***’a-kun*** ***’a-‘rifu*** *šay’an ‘ani l=muṭribati ’umm kulṯūm.*
not I-was I-know thing about the=singer ’Umm Kulṯūm
「私はウンム・クルスームという歌手について何も知らなかった」(WH: 160)

状態を表す動詞の未完了形に関しては、一般的に未完了形に用いられる否定辞 *lā* に代わり、(29) 否定コピュラ動詞 *laysa*「…ではない」が否定辞として用いられることがある。

(29) ***las-tu*** ***’u-qīmu*** *fī hāḏā l=manzili.*
am.not-I I-stay in this the=house
「私はこの家に住んでいない」(B: 539)

この他、(30a) 動作の開始 (inceptive/inchoative; e.g. *bada’a, ’aḵaḍa, maḍā, ja‘ala, šara‘a, qāma, ṭafiqa*)、(30b) 状態／習慣の変化 (change of state; e.g. *’aṣbaḥa, ’amsā, ṣāra*)、(30c) 継続 (continuative; e.g. *ẓalla, baqiya, bāta, mā zāla*)、(30d) 再開 (resumptive; e.g. *‘āda*)、(30e) 近接

(immediative; e.g. *kāda, ’awšaka*) などの種々の相を表す動詞が存在し、後続動詞との間には接続詞等が介在しない。ただし、これらに後続する動詞は未完了形となる[13]。

(30) a. ***bada’-at*** *barāmiju t=ta‘līmi* ***ta-taġayyaru*** *munḏu s=sittīniyyāti*
started-they programs the=teaching they-change since sixties
「60年代から教育プログラムが変わりはじめた」(WH: 308)

b. ***’aṣbaḥ-nā*** ***na-nẓuru*** *li=l=’amri min ‘iddati zawāyā*
became-we we-look for=the=matter from several angles
「我々は物事を色んな角度から見るようになった」(B: 460)

c. ***ẓall-at*** *māriyā* ***tu-ṣirru*** *‘alā ’anna...*
continued-she Maria she-insist on COMP
「マリアは断固として…といい続けた」(B: 468)

d. *fa=****‘ād-a*** *ṣadīq=ī* ***ya-qūlu*** ...
then=returned-he friend=my he-say
「すると私の友人はもう一度…と言った」(B: 476)

e. ***ya-kād-ūna*** ***ya-ṣil-ūna*** *’ilā l=‘āṣimati.*
they-almost.do-they they-reach-they to the=capital
「彼らはもうすぐ首都に着くところだ」(A2: 256)

これらの構文について、それぞれの動詞がどのように否定されるかについては詳細な分析がされていないが[14]、始動・状態変化動詞については (31) のように否定標識の位置と否定のスコープが一致するようである。ただし、動詞 *kāda* については、(32) のように二通りの否定が可能である (ただし意味は「ほとんど〜できない」となる) ことが知られている。

(31) ***’aṣbaḥ-a*** *lā* ***ya-taḥaddaṯu*** *fī l=mawāḍī‘i s=siyāsiyyati*
became-he not he-talk in the=subjects the=political
「彼は政治的な話題について話さなくなった」(WH: 307)

(32) a. *lam* ***’a-kad*** ***’u-ṣaddiqu*** *‘aynay=ya*
not I-almost.did I-believe eyes.DU=my

b. ***kid-tu*** *lā* ***’u-ṣaddiqu*** *‘ayn-ay=ya*
almost.did-I not I-believe eyes.DU=my
「私はほとんど自分の目を信じられなかった」(WH: 308)

これに対し、モダリティ (法) を表す動詞 (e.g. *istaṭā‘a*「～できる」、*ḥāwala*「～してみる」、*’arāda*「～したい、～しようとする」、*’abā*「～したくない、～することを拒む」) の後続動詞は、(33a) のように接続法となり補文標識 *’an* がそれに先行する、あるいは (33b) のように動名詞目的語となる。

(33) a. *lam* ***ya-staṭi‘*** *<u>’an</u>* ***yu-ḥaqqiqa*** *’ayya šay’in*
not he-was.able COMP he-achieve.SBJV any thing
「彼は何も実現できなかった」(B: 474)
b. *lā* ***ta-staṭī‘u*** ***<u>fi‘la</u>*** *šay’in*
not she-be.able doing thing
「彼女はなにもできない」(B: 474)

ただし、例外的に、一部のアスペクト動詞に関して、動詞 *kāda* は (33a) 型の構文、始動動詞は (33b) 型の構文として現れうる[15]。

(34) a. ***kād-a*** *<u>’an</u>* ***ya-qūla*** *na‘am.*
almost.did-he COMP he-say.SBJV yes
「彼はすんでのところで「はい」というところだった」(A2: 256)
b. ***bada’-nā*** ***<u>t=tadrība</u>*** *‘alā s=silāḥi yawma=hā*
started-we the=training on the=weapon day=its
「我々はその日火器の訓練を開始した」(B: 483)

3. おわりに

本稿では、アラビア語には「動詞連続」と呼ぶことが妥当にみえる構文が存在していることを示し、それらを大まかには (35) の 8 種ほどのサブタイプに整理した。

(35) a. 先行動詞 + 後続動詞 = 連鎖的動作
b. 後続動詞 = 付帯状況
c. 後続動詞 = 動作の目的
d. 後続動詞 = 命題を表す補文
e. 後続動詞 = 直接経験を表す補文
f. 後続動詞 = 発話内容を表す補文の導入
g. 先行動詞 = 使役動詞
h. 先行動詞 = 時制・相動詞

この他、本稿では一見表層的には動詞連続に類似するが (1) の定義からは逸脱する構文として、臨場感のある会話文での等位接続 (2.1節)、敷衍節 (2.2節)、非限定先行詞を修飾する関係節 (2.5節)、直接話法を表す補文 (2.6節)、ある種の条件文 (2.7節) などがみられることも示した。

特に以上のうち、(35b, e, f) の諸構文は機能的には大きく異なるにも関わらず、アラビア語統語論的には同じ構造をもつため、これまでの文法書・教科書類では別の構文としては整理されてこず、外国語としてのアラビア語学習者に混乱を招いてきた恐れがある。さらに Wright (1967: 20, 105) や Bedawi et al. (2016: 460) のように、例えば (35b) と (35h) の整理に混乱が見られる、Fischer (2006: 221ff., “predicate circumstantial clauses”)、Badawi et al. (2016: 642-643) や Ryding (2005: 285) のように本稿で扱った諸構文の一部が表層的類似をもとにおおまかに一括りにされる、などの科学的とはいえない説明が行われてきた。

しかし、例えば (36) *ja‘ala* のように (35g) 型使役動詞としても (35h) 型 始動動詞としても使用できる多義動詞の存在や、(37) のように先行動詞の多義性と構文的多義性のために解釈が 3 通り以上ありうる構造の存在が指摘できる。第1節で述べたようにこれまでのアラビア語学習者が何の指針もなくこれらをすべて文脈によって解釈できてきたらしいこと自体興味深い事実ではあるが、アウトプットが重視される現今の教育方針において学習効率を高めるためには、本稿で試みたような分析が役立つ可能性は高い。

(36) a. ***ja‘al-a*** *l=ba‘ḍa* ***ya-tasā’alu***
made-it the=some it-wonder
「それは幾人かの人をいぶかしめた」(B: 426)

b. ***ja‘al-at*** ***ta-ṣīḥu***
started-she she-shout
「彼女は叫びはじめた」(B: 484)

(37) ***jā’-a*** ***ya-f‘alu***
came-he he-do
a. (35b) 型：「彼は…しながら来た」
b. (35c) 型：「彼は…しに来た」（あるいは「彼は…してきた」）
c. (35h) 型：「彼は…しはじめた」

第1節で述べたとおり、本稿の目的は最終的なアラビア語における「動詞連続」に関する類型論的議論ではなく、以下のような課題が残っている。

まず、本稿では最広義における「動詞連続」の事例を収集・整理することを目的とした

ため、その他の言語類型論研究者による「動詞連続」の定義、ないしこの概念自体の脱構築にとって、アラビア語の例がどのようなデータをもたらすか、といった理論的問題は扱っていない[16]。また、本稿はあくまで伝統的アラビア語学における主要な研究蓄積にのみ依拠しており、動詞連続に関連するすべての構文が網羅されている保証はない[17]。さらに、どういった発話場面・文体・文学ジャンル等にこれらの構文が分布するかなどの問題も残されている。こうした問題に対し、一次資料に基づくアラビア語動詞連続研究を行っていくことは、ひいては言語学 (たとえば言語類型論) 的研究において利用可能なアラビア語データの拡充へとつながることが確実であり、今後の研究が強く俟たれる。

注

1) 本稿では断りがない限り「アラビア語」は現代文語／標準アラビア語 (Modern Written/Standard Arabic) を指す。本稿は 2019 年 1 月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にてフィールド言語学ワークショップとして行われた第 14 回文法研究ワークショップ「動詞連続の諸問題」での著者による発表「アラビア語諸変種と動詞連続」の内容の一部を加筆・修正したものである。同企画担当・発表者の倉部慶太氏 (アジア・アフリカ言語文化研究所)、同企画発表者の伊藤雄馬氏 (富山国際大学)・山本恭裕氏 (日本学術振興会) に記して謝意を表したい。
2) 例外的に Hussein (1990) や Versteegh (2003-2005, 2009) など、「動詞連続」という術語を用いた研究は存在するが、対象は口語諸方言に限られており、扱われている現象も網羅的でない。
3) 本学アラビア語専攻で 2017-2019 年度前期に著者が担当した授業（特に 2018 年度アラビア語 II）での複数の学生諸氏との応答にもとづく。
4) ただし、動詞連続に限らず、Comrie (1991) はアラビア語の事例が一般言語学的な議論に十分用いられていないことを指摘しているが、現在でもその状況は根本的に変化していない。
5) 本稿では、人称活用が義務的であり、あらゆる構文に実現可能な、いわゆる完了形・未完了直説法形（および否定辞と共起している接続法・希求法）のみを「定動詞形」とみなす。なお、アラビア語では非定形動詞としては動名詞 (無変化) と分詞 (態・性・数により変化) が存在する。
6) 名詞句や動詞の一致要素の性・数・格・限定性等に関する文法情報は、本稿では基本的に省略する。ただし、例文逐語訳には以下の記号を用いる：- 接辞境界、= 接語境界、SG/DU/PL 単数／双数／複数、M/F 男性／女性、JUSS/SBJV/IMP 希求法／接続法／命令法、PTCL 多義的動詞前小辞 (*qad*)、Q Yes/No 疑問文標識、COMP 補文標識、ADV 副詞的対格。アラビア語転写は、*EALL* (Versteegh et al. eds. 2006-2009) の方式に則る。なお、注意を要する転写には以下のものがある：/V̄/ [V:], /ʾ/ [ʔ], /ʿ/ [ʕ] , /ḍ/ [dˤ], /ḏ/ [ðˤ], /ġ/ [ɣ], /ḥ/ [ħ], /ḵ/ [x], /ṣ/ [sˤ], /š/ [ʃ], /ṭ/ [tˤ], /ṯ/ [θ]。
7) いずれも現代ではまず見られない古典期の例であり、(3b) の先行動詞、(3c) の後続動詞は語彙的意味が脱色されているように見えるが、当時において文法化していたかは今のところ議論できない。ただし、口語アラビア語諸変種では、広く *qāma*「立つ」の同源語が (3b) のような構文において場面展開を表す要素として文法化している例が見られる (Brustad 2000: 147-148)。なお、Wright は等位接続詞 *fa*= などを挿入したほうが「古風かつ優美」('older and more elegant form of expression') としている (W2: 288)。ただし、韻文ではあるが、イスラーム初期のものとされる有名なアラブ民謡 *ṭala'a l=badru 'alay=nā*「満月が昇った」にも ***ji'-ta šarraf-ta*** *l=madīna* (gloss: came-

you honored-you the=town)「あなたは来てこの町に栄誉を与えた」のような一節が見られる。

8) なお、義務的ではないが一般的には、未完了形が続く場合は *wa=* の後に主語独立代名詞が、完了形が続く場合は *wa=* の後に動詞前小辞 qad が伴う。

9) これに加え、*wa=* + 人称代名詞 + 分詞という構造、例えば ***waṣal-a*** *l=wazīru* ***wa=hwa*** ***ḥāmilun*** *rasā'ila hāmmatan* (gloss: arrived-he the=minister and=he carrying letters important) や、付帯状況を表す接続詞 baynamā 'while' などを使った構造、例えば ***waṣal-a*** *l=wazīru* ***baynamā*** ***ya-ḥmilu*** *rasā'ila hāmmatan* (gloss: arrived-he the=minister while he-carry letters important) も可能である。

10) 両動詞は異主語でもありうるため、文脈によっては「彼女は、（相手の）彼女が笑っているときに話しかけた」という解釈もありうる (B: 649)。ただし、それぞれの構文は完全に言い換え可能ではなく、(6a, c) 型の構文は時間的状況 (「～であった／していた時」) を表すことができるが、(6b) はできない (cf. WH: 278-281)。

11) 口語アラビア語諸変種では、広く *jā'a*「来る」の同源語などが、(16) のような構文において継起を表す要素へと文法化している例が見られる (Brustad 2000: 147)。

12) Badawi et al. (2016: 427) は以下の例文を (18b) と同様の構文ととらえているが、これは直接経験自体を表しているわけではないため、2.4 節でみた (16) 型の構文と考えたほうが妥当そうである: ***wajad-nā*** *ba'ḍa l=masājida* ***ta-ṭlubu*** *t=tabarru'a* (gloss: found-we some the=mosques they-request the=donation)「我々にはいくつかのモスクが寄付を必要としていることが分かった」。この場合、(16) 型・(18) 型の構文は動詞ごとに相補分布するわけではないといえる。

13) ただし、Fischer (2006: 221) は ***'u-msī*** *qadi* ***nqaṭa'-a*** *bay=nī wa bayna=hū* (gloss: I-become PTCL was.cut-it between=me and=between=him)「私は結果として、私と彼の紐帯が切れてしまった、ということになるかもしれない」という文を挙げているが、少なくとも現代では一般的でない。

14) 以下で挙げているもののほか、***lam*** *ya-zal* / ***mā*** *zāl-a*「(彼は) まだ～している」、***lam*** *ya-'ud*「(彼は) もはや～しない」など、否定辞を必ず伴うアスペクト動詞類も存在する。

15) なお、現代標準アラビア語の規範としては逸脱的ではあるが、古典期には法動詞についても、以下のような (30) 型の構文をとることがあった。***'arād-ū*** ***ya-qtul-ūna****=hū* (gloss: wanted-they they-kill-they=him) = ***'arād-ū*** *'an* ***ya-qtul-ū****=hu* (wanted-they COMP they-kill.SBJV-they=him)「彼らは彼を殺さんとした」(F: 221)。なお、始動動詞 *'akaḍa* は動名詞を項とする場合、***'akaḍ-a*** *fī* ***ṣ=ṣiyāḥi*** (started-he in the=shouting)「彼は叫び始めた」(B: 482) のように前置詞 *fī* 'in' が要請される。この他、(30d) 再開相を表す *'āda* は、***'ād-a*** *wa=****ṣarraḥ-a*** (returned-he and=declared)「彼は再び宣言した」(B: 476) のように疑似等位接続 (hendiadys) による言い換えも可能である。

16) 例えば、通言語的には、動詞連続構文は孤立型言語に、副動詞構文は複雑な動詞形態論をもつ言語に典型的にみられる傾向があり、これら二種の構文はおおまかには相補的に分布する傾向がある (cf. Bisang 1995)。しかし、複雑な動詞形態論をもつアラビア語で動詞連続がみられ、かつ (35b) 付帯状況構文、(35c) 目的構文、(35e) 直接経験を表す補文、(35f) 発話内容を表す補文、などが動詞連続・副動詞両構文で表されうる点は類型論的に稀有だといえそうである。また、相や相対時制に関わる表現が動詞連続構文をとることは珍しくはないが、(27) のように絶対時制にかかわる表現が動詞連続で示されることも通言語的にはありふれた事例ではない。なお、こうした類型論的には「動詞連続」としては「稀有」たりうる現象の大部分を、「動詞連続」から除外する「通言語的概念」としての定義もありうる (例えば Haspelmath 2016) が、本稿で述べた類型論

の有用性の観点からは支持できない。

17) 例えば、イフサーン・アッバースによるメルヴィル『白鯨』のアラビア語訳 (Melville 1980: 55) には以下のように (35) で述べたいずれのサブタイプにも分類しがたい例もみられる：... *sarīrin ḍaḵmin* ***ya-ttasi'u*** *ḥaqqan li='arba'ati ḥawwātīna* ***ya-nām-ūna*** *fī=hi* (gloss: bed huge it-be.sufficient really for=four harpooneers they-sleep-they in=it)「確かに 4 人の銛打ちが寝るのに十分な巨大なベッド」。現時点では、この構文がどの程度生産的といえるか不明であり、分析は控えたい。

参考文献

（日本語文献）

仲尾　周一郎

2019　「アラビア語教育における「音韻規則」の扱いについて」『外国語教育のフロンティア』2、335-353。

（外国語文献）

Abboud, Peter F. and Ernest N. McCarus (eds.)

1983　*Elementary Modern Standard Arabic*, Part 1-2 (3rd ed.), Cambridge University Press, Cambridge.

Badawi, Elsaid M., Michael G. Carter and Adrian Gully (revised by Maher Awad).

2016　*Modern Written Arabic: A Comprehensive Grammar* (Revised Edition), Routledge, Oxon/ New York.

Bisang, Walter

1995　"Verb Serialization and Converbs: Difference and Similarities" in Martin Haspelmath and Ekkehard König (eds.), *Converbs in Cross-linguistic Perspective: Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms*, Mouton de Gruyter, Berlin, 137-88.

Brustad, Kristen E.

2000　*The Syntax of Spoken Arabic*, Georgetown University Press, Washington, D.C.

Cantarino, Vicente

1975　*Syntax of Modern Arabic Prose*, Vol. 3, Indiana University Press, Bloomington/London.

Comrie, Bernard

1991　"On the Importance of Arabic to General Linguistic Theory", in Bernard Comrie and Mushira Eid (eds.), *Perspectives on Arabic Linguistics: Papers from the Annual Symposium on Arabic Linguistics. Volume III: Salt Lake City, Utah* 1989, John Benjamins, Amsterdam/ New York, 3-30.

Fischer, Wolfdietrich

2006　*A Grammar of Classical Arabic*, Yale University Press, New Haven/London.

Haspelmath, Martin

2016　"The Serial Verb Construction: Comparative Concept and Cross-linguistic Generalizations", *Language & Linguistics* 17 (3), 291-319.

Hussein, Lutfi

1990 “Serial Verbs in Colloquial Arabic”, in Brian D. Joseph and Arnold M. Zwicky (eds.) *When Verbs Collide: Papers from the 1990 Ohio State Mini-Conference on Serial Verbs*, Ohio State University Department of Linguistics, Columbus, 340-354.

Melville, Herman (translated by Iḥsān ‘Abbās)

1980 *Mūbī Dīk*, Mu’assasat Nāṣir li=ṭ=Ṭibā‘a, Bayrūt.

Ryding, Karin C.

2005 *A Reference Grammar of Modern Standard Arabic*. Cambridge University Press, Cambridge.

Versteegh, Kees

2003-2005 “Some Remarks on Verbal Serialization in Arabic Dialects”, *Cahiers de Linguistique d’INALCO* 5: 49-69.

2008 “Serial Verbs”, in Kees Versteegh et al. (eds) *EALL*, Vol. 4, 195-199.

Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.)

2006-2009 *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics (EALL)*, Vol. 4, Brill, Leiden.

Woidich, Manfred and Rabha Heinen-Nasr

2011 *al-Kitāb al-mufīd: An Introduction to Modern Written Arabic*, The American University in Cairo Press, Cairo.

Wright, William

1967 *A Grammar of the Arabic Language*, Part 2 (3rd ed.), Cambridge University Press, London/ New York.